昨日の常識は今日の非常識

札幌医科大学医師会
斗南病院
坪　田　　大

このたび北海道医師会より、年男となる会員として北海道医報に随想を寄稿するよう要請があった。年男というと、今年で５回目。60歳の還暦ということで、いまさらながら年を取ったことに感慨ひとしおである。

随想のテーマを何にすべきか迷ったが、医師になって30有余年ということで、過去と現在との移り変わりを頭に浮かべてみた。

ちょうど私が学生時代、臨床講義を受けている頃にテレビでは田宮二郎主演の白い巨塔の再放送をしていた。当時のこととて、ドラマ中では術前に肺転移が確認できたかどうか、断層撮影で鑑別できるかどうかの意見が戦わされたり、術前術後の化学療法に効果が期待できるかできないかという議論がなされたりしていたが、今ではCTやPETで転移の診断はかなりの精度で行えるようになったし、化学療法もルーチンに行われる時代となっている。記憶をたどると、私が国家試験を受けたときに出題されたCT画像たるや、モザイク模様の幻のような画像であったから、現代からは想像もできない話で、今の時代ではもはや白い巨塔の設定は成り立たなくなっているのである。現代ではむしろ、せっかく検査した結果を見落としたために診断が遅れたという事例がニュースになっている。

卒業して入局してからは、毎日のガーゼ交換というのがなかなか大変な行事で、広範囲の腫瘍切除や再建手術を受けた患者さんのガーゼ交換たるや、イソジン消毒に始まって数十枚のガーゼを貼り合わせ、ミイラ男のような出来上がりであった。そのような患者さんが数人いれば、半日がかりの仕事になる。しかし今では手術創部のイソジン消毒は不要とされ、滲出液がなければガーゼ交換も不要で、透過性のあるドレッシング剤を貼って経過を見ればよいというのが一般的である。あの努力は何だったのだろう。

医師と病院との連絡手段も、今では病院からスマホが支給されるような時代となっているが、私が入局したころは自前でポケベルを契約し、持って歩いていた。休日にポケベルが鳴ったが近くに公衆電話が見つからず、何キロも車で走ってようやく電話を見つけたら、別に明日でもいいような要件だったりしたというのは、当時を知るドクターのあるあるではないだろうか？　田舎に行くとポケベル圏外というところもあって、町の一斉放送で呼び出されるというようなこともあった。一時期高校生たちがポケベルでメッセージをやり取りするようになったため、放課後の時間になると一斉に通信頻度が高まって、大事なポケベルがつながりにくくなるというトラブルもあった。それに比べると今では容易に連絡が取れるようになったのだが、ポケベル時代と比べると、頻繁に電話がかかってくるようになっていて、そんなに急ぎの要件が本当にあるのか？と、疑問を感じないでもない。

スマホの功罪についてはいろいろな意見もあると思うが、昔なら薬剤ハンドブック的なものを持ち歩いていたものが、スマホがあれば各薬剤の添付文書から、医療材料の説明書、はては保険点数まで直ちに検索でき、医療機関情報もすぐに調べて電話も掛けられるところなどは、やはり便利と言わざるを得ない。

かように、私が医師になってからの30有余年、否ここ10年くらいの間にも、画像診断、内視鏡やロボット手術、抗癌剤から分子標的薬やら免疫療法と、次々と学習しなければならないことがらが押し寄せてきて、昨日の常識は今日の非常識となり、医学は日進月歩との感があるが、われわれ凡人が理解できているレベルの数学などはせいぜいデカルトやニュートンの時代からあまり進んでいないことを考えると、実は医学というのはまだまだ未熟な学問なのかもしれない。そのおかげで私のような凡庸な医師でも、その発展の現場に多少なりとも近づけるということであれば、幸せなことだと思う。